

漢～唐代の遺跡で出土した指輪とその出現背景

大 谷 育 恵

1. はじめに

今回の共同研究が対象とする東晋十六国期という時代について考えてみると、一時的に再統一を果たした西晋が再び八王の乱を契機に崩壊したことに始まる南北間の分断に加えて、華北地域では北から流入した北方諸民族を交えて政権が乱立し、興亡を繰り返した時期といえる。政治的には分裂期であり、新たな統合を模索した時期といえるが、物質文化の点からはどのような様相を窺うことができるのであろうか。筆者はこれまで金属を素材とした装身具を分析資料とし、現中国国内の資料を広域的あるいは時代横断的に集成することで淵源関係や新たな型式が出現する画期について考えてきた（大谷2011・2012）。前稿では服飾の観点から装身具を頭飾、耳飾、頸部飾、帯飾、牌飾の5種類に分類して考察したが、その際に考察していなかったのが指輪である。

先行研究をみると、指輪は異なる2つの着眼点から研究対象となっている。一方は指輪がどのような意義をもって使用されていたのかについて当時の風習、風俗に主眼を置いて考察したもので、文献史料中にみられる事例から婚姻などとの関係を考察した論考（黄正建2006）や、服飾研究の観点から漢代の出土資料を集めた考察（林已奈夫1976）がある。もう一方は東西文化交渉の観点から考古資料として考察したもので、貴石印章指輪と呼ばれる画像を彫り込んだ宝石を象嵌した指輪が考察対象となっている（張慶捷・常一民2003、張慶捷2010、岩本2005a・b・2006）。したがって出土資料である指輪を考察する場合、外来の特殊資料としての位置づけがある貴石印章指輪については検討されたことがあるものの、中国⁽¹⁾における指輪にどのようなものがあつたのかについては、全体像が示されていない。そこで本稿は中国が分裂する以前の漢から再度統合された後の唐にわたる長い期間を設定して考察する。該当時期の指輪を集成した後には、非中国系資料の貴石印章指輪の特殊性や流入に関連する時代画期も明らかになるはずである。

以下本稿で対象とする指輪はその形態から指輪であると判断できるものに限定する。すなわち金属線を環状に形作っただけの小環は耳飾にもあり、出土状況が分からなければ判断できないためである。

2. 指輪の分類

指輪は装飾が施される部位の違いから2種類に大別した。指輪Aは指にはめる環の表面全体を装飾した指輪である。それに対して指輪Bは輪の特定の位置に装飾部が付き、見せるべき中心位置が決まっている指輪である。

(1) 指輪A

環の外側の表面全体を装飾した指輪Aは、その装飾文様に刺突文と龍文の2種類がある。前者をaとc、後者をbとして分類した。

Aa型（指貫形の指輪） 指輪表面に刺突文を規則的あるいはランダムに施文しており、報告中でしばしば「頂針」（指貫）と呼称される指輪である（図1-1）。実年代の推定できる初出資料は江蘇省揚州市の宝女墩104号墓で、1周の刻み目列を入れた幅の細い指輪が出土している。この墓は広陵王墓と推定されており、下葬年代は居摂二年（7）以降である⁽²⁾（揚州博物館ほか1991）。指貫形の指輪の場合は、陝西省華陰県の劉崎墓で出土した資料に後漢の陽嘉三年（135）以降の年代を与えることができる⁽³⁾（杜葆仁ほか1986）。管見の限りでは、盛行期は後漢中晩期～三国期のようなのである。

Ab型（龍文指輪） 江蘇省南京市の上坊1号墓から出土した1点が該当する（図1-2）。報告では「2匹の首を交えて向き合う龍文を外側に鑿彫りし、龍眼内の象嵌は失われている」と記述されているが、写真では龍の額部分に各1点の象嵌があるように見える。上坊1号墓は築造されてから間もなく盗掘に遭っていたため出土遺物は多くなかったが、その規模は前室後室共に左右耳室を有する大墓で、設えも虎形の石棺座を備えるなど豪華であることからみて、呉末期の宗室諸王クラスの墓と考えられている（南京市博物館ほか2008）。

Ac型 全面を粟粒文で飾る点はAa型とした指貫形の指輪に似るが、幅広の部分がある指輪で、また環状につながっていないものが多い（図1-3）。Aa型よりは年代的に後出であるとみられる。

(2) 指輪B

環の1ヶ所に正面ともいえるべき装飾部が付いた指輪を指輪Bとした。装飾部の形状と嵌

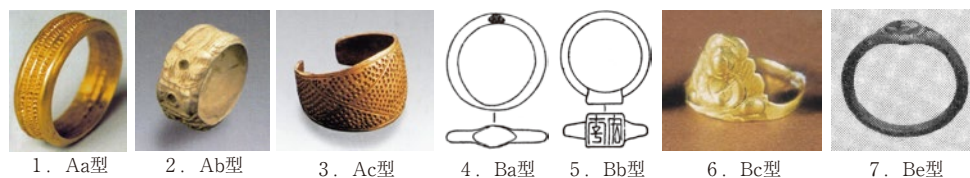


図1 中国出土の指輪（Aa～Ac型、Ba～Bc、Be型）

石の有無に従って、a～c、e～jの合計9型式に分類した⁽⁴⁾。

Ba型 環の一部に面を作り出した指輪である(図1-4)。面の内側がやや窪む指輪や、平坦面に小さな装飾を刻んだ指輪もある。管見の限りにおいて最も早い時期の資料は、広西壮族自治区貴港市の深釘嶺43号墓が前漢晚期(広西壮族自治区文物工作隊ほか2006)、広東省広州市の恒福路銀行療養院2期工地21号墓が前漢(馮永駆2005)とする。後漢～魏晋期の遺跡で出土例が多い。

Bb型(漢字印章指輪) 装飾部に漢字が刻まれた印章指輪である(図1-5)。後漢の3ヶ所の遺跡で各1点が出土している。

Bc型 環の片側に突出する山形の装飾部がある指輪で、結跏趺坐する人物の表現がある(図1-6)。江西省の南昌火車站6号墓で4点(江西文物考古研究所

ほか2001)、安徽省の盆山1号墓で1点(馬鞍山市文物管理所1990)が出土している。資料が出土した出土した遺跡の年代は三国～両晋である。

Be型 装飾部に小さな石を嵌めた指輪である(図1-7)。この指輪が出土した遺跡のうち最も年代が早いのは湖南省耒陽市の白陽渡29号墓で、後漢中期である[衡陽市文物處ほか2008]。良く知られている資料としては、8面体のダイヤモンドを象嵌した象山7号墓の指輪がある。男性を中央にして左右に女性の棺が安置されており、指輪は男性棺の中部で出土している(南京市博物館1972)。

Bf型 獣面形の装飾を持つ指輪である。内蒙古烏蘭察布盟の小壩子灘窖藏^{オランツァブ}で1点が出土した(張景明2002)(図2)。キツネのような動物を正面から見た顔の形をしており、両目の象嵌のうち右眼のみに緑色の石が残っている。

Bg型 遼寧省北票県の房身村2号墓で出土した指輪をBg型とした(陸大為1960)(図3)。装飾部には角のとれた長方形の石1点を半円形の石2点で挟みこんだ構成を3つ並べている。またこの指輪は装飾部と環が接する指輪腕部が三角形に幅広くなっており、この部分



小壩子灘窖藏
図2 Bf型指輪



房身村2号墓
図3 Bg型指輪



1. 美岱村1955年
北魏墓



2. 呼和浩特市郊



3. Pierre Uldry
collection

図4 Bh型指輪



481年 定県石函



図5 Bi型指輪

にも菱形1つと三角形2つを組み合わせた象嵌が入る。この指輪の象嵌枠の周囲は金粒で装飾されている。指輪の石は5か所に残っており、長方形の石のみが緑色で、その他4ヶ所は藍色である。長方形の石の表面には刻み線があり、何らかの表現があった可能性もある。

Bh型 立体的な羊の造形が装飾部上に乗った指輪である。腕の部分はBg型と同じく三角形に幅広く、象嵌が入る。Bh型の指輪は3点あり、このうち2点は共に内蒙古呼和浩特市近郊の北魏墓で出土している。1点は1955年に同市郊外的美岱村北魏墓が破壊を受け発見された際の回収遺物である（李逸友1957）（図4-1）。2点目は美岱村北魏墓から東に約200mの所で1961年に発見された墓の回収遺物である（内蒙古文物工作隊1962）。報告では記述のみで図がないが⁽⁵⁾、呼和浩特市郊出土として展覧会図録に掲載されている指輪が存在し、この墓出土の指輪に該当するとみられる（図4-2）。

Bi型 河北省定州市⁽⁶⁾の華塔址で石函が出土し、その中から5657件の遺物が発見された。その中には2点の指輪が含まれており、Bi型とした。この定県石函の蓋には北魏太和5年（481）に孝文帝がこの地を行幸し塔を建てた事が刻まれており、これら遺物は舍利とそれを納めた石函であったことが分かる（河北省文物局文物工作隊1966）。指輪は共に装飾部に円形の石1点を嵌め、象嵌枠の周囲は菊花状である。環の表面も鏤彫りで装飾されており、1点は1列の円文列の両側を内傾する斜線文列で挟んだ文様構成、別の1点は三つ編み状の文様を刻んでいる（図5）。

Bj型 大きな宝石1点を中心に嵌めた指輪である。大きな宝石を支えるために腕部も太く、相対的に指輪は大型である。石には人物や動物の画像を刻んだものも多く、それらについては貴石印章指輪と呼ばれている。このBj型指輪については、以下出土遺跡ごとに詳細に見てゆく。

（3）Bj型指輪の諸例

苗圃20号墓 遼寧省遼陽市に所在する磚室墓である。男性1体を挟んで女性2体が埋葬されており、男性の遺体付近で銀製の指輪1点が出土した（遼寧省文物考古研究所2014b）。中央には透明度の高い石を象嵌する。両腕部上にも象嵌があり、この枠の周囲を金粒1列を並べて装飾している。その片方にはトルコ石が残っている（図6-1）。報告では前漢中晩期の墓としている。

湖東北魏墓 山西省大同市の南東に位置する湖東墓地において、2005年に調査された北魏墓より指輪1点が出土したという（張慶捷2010）。象嵌された石は残存していなかったが、窪みは長さ13mm、幅9mm、深さ4mmあり、楕円形の石が嵌められていたらしい（図6-2）。

呂達墓（北魏：正光五年（524）卒葬） 呂達墓は黄河北岸の河南省洛陽市吉利区で発見され

た（洛陽市文物工作隊2011）。青色の石を嵌めた指輪（C 9 M315：51）が出土している。石には片足を後に90° 跳ね上げ、両手も肘から先を上に向けた人物が刻まれている。嵌石の周囲には金粒を1列並べている（図6－3）。

李希宗・崔氏合葬墓（東魏：武定二年（544）葬） 李希宗・崔氏合葬墓は河北省石家荘市に所在する（石家荘地区革委会文化局文物発掘組1977）。出土した指輪1点は藍灰色の石を嵌めた指輪で、嵌石枠の周囲は2周の金粒列で囲んでいる。報告では石に刻まれた文様を鹿1匹としているが、四足獣と三叉の枝の先に蕾のついた植物のモチーフとすべきであろう（図6－4）。

李賢・呉輝合葬墓（北周：天和四年（569）合葬） 李賢・呉輝合葬墓は寧夏回族自治区固原市に所在する。青色の石を嵌めた指輪1点が出土した（寧夏回族自治区博物館ほか1985）（図6－5）。石に彫られた人物は両手を挙げて、両端に袋状の物がついた弧線をつかんでいる。報告では出土位置から妻の呉輝の所用物とする。

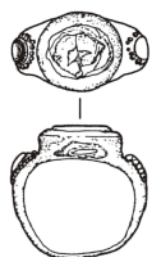
徐顕秀墓（北齊：武平二年（571）卒葬） 徐顕秀墓は山西省太原市に所在する。金製と銀製の指輪が各1点出土しており、銀製の指輪（資料414）がBa型、金製の指輪（資料413）がBj型の指輪である（太原市文物考古研究所ほか2003）。象嵌された宝石はトルマリンと鑑定されている。宝石には歩行しているかのような人物の側視像を刻んでおり、人物は両手に1つずつ持ち物を持つ。前側の手には下側に2本棒を貫いたようなもの、後方の手は下端に尖る表現のある棒をつかむ。象嵌枠の周囲には金粒列が一周巡っている。嵌石台を支える両腕は獅子のような獣頭だが、頭部以下は鱗状の表現である（図6－6）。

史君・康氏合葬墓（北周：大象二年（580）葬） 史君墓は陝西省西安市に所在する。指輪に象嵌された石はトルコ石（緑松石）で、長方形の上辺を斜めに広く切り落としたバゲットカットである。石を嵌める嵌石台の両側面にV字状の陰刻がある（図6－7）（西安市文物保護考古所2005, 西安市文物保護考古研究院2014）。

李静訓墓（隋：大業四年（608）卒葬） 李静訓墓は陝西省西安市に所在する。墓誌の記載から李静訓の外祖母は楊堅の長女にして北周宣帝皇后の楊麗華で、彼女に養育されていたが幼くして亡くなったことが判明する（唐金裕1959）。この墓からはトルマリンをペンダントトップとする豪華な首飾りが発見されており、その留金金具は指輪の転用ではないかと推測されている。青色の宝石には鹿の画像が彫られている（図6－8）

史射勿墓（隋：大業六年（610）葬） 史射勿墓は寧夏回族自治区固原県に所在する。指輪1点が出土したが石は欠失しており、金製の本体部分のみが残ってる。穴の形状から円形に近い平面形の石を嵌めていたと思われる（図6－9）（寧夏文物考古研究所他1992, 羅豊1996）。

史訶耽・張氏合葬墓（唐：咸亨元年（670）葬） 史訶耽は史射勿の子であり、同じ小馬庄



1. 苗圃M20:10



2. 湖東北魏墓



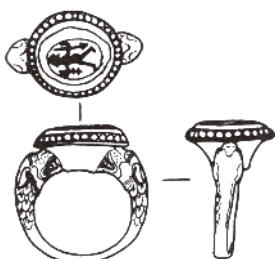
524年
3. 呂達墓
(C9M315:51)



544年
4. 李希宗・崔氏合葬墓



569年
5. 李賢・吳輝合葬墓



571年
6. 徐顯秀墓



580年
7. 史君・康氏合葬墓



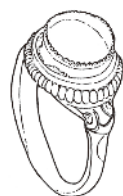
608年
8. 李静訓墓



610年
9. 史射勿墓



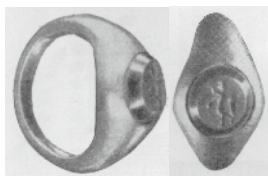
670年
10. 史訶耽・張氏合葬墓



11. 美岱村
北魏墓



12. 畢克齊鎮①



13. 畢克齊鎮②



14. 杏園YDM1902:51



左右反転



15. 朱倉1号墓

図6 B型指輪

村の史氏墓地中にある。出土したのは藍灰色の石のみである（図6-10）（羅豊1996）。平面には獅子1頭と、獅子の背上位置に三叉の枝の先に蕾のついた植物が刻まれている。外周にはパフラヴィー語の銘文が刻まれており、様々な釈読案が示されている⁽⁷⁾。

美岱村北魏墓 内蒙古呼和浩特市郊外的美岱村北魏墓で貴石1点を象嵌した指輪が出土したという（張慶捷2010）⁽⁸⁾。指輪の両腕部分は獣頭形で、緑色の石を嵌めた嵌石枠の周囲は連珠紋で装飾されているという（図6-11）。

畢克齊鎮北朝墓 内蒙古土默特左旗で工事中に人骨と共に金銀器が出土し、回収された遺物のうち2点が指輪であった（内蒙古文物工作隊ほか1975）。2点共にBj型の指輪で、1点は黒に近い深紫色の厚みのない石が面から突き出るような形で嵌められている（図6-12）。別の1点は画像のある黒色の石を象嵌した指輪である（図6-13）。画像は歩行しているかのような人物の側視像で、一方の手は前方に伸ばし、背後に何かを担いでいる。同時に出土した金銀器の中には東ローマのレオI世（457～474）の金貨があることから、文成帝の太和三年（474）以降の年代を与えることができる。しかし同時に回収された遺物の中には高足銀杯と翼状の頸部飾もあり、総合的に考えると6世紀以降の北魏末～北朝期の墓とするのがふさわしい。

杏園1902号墓 河南省偃師市の杏園1902号墓から指輪1点が出土した。指輪の出土位置は被葬者右手であった。石はやや不整形な楕円形の紫水晶で、パフラヴィー語で「pd」（abd：驚愕、驚嘆の意）と刻まれている（図6-14）（中国社会科学院考古研究所河南二隊1996、森本1996）。

朱倉1号墓 河南省洛陽市孟津県の北魏墓群のうちの1基で、銀製の指輪が出土した。石は失われている。

3. 各型式指輪の出現とその文化的背景について

以上において、漢から唐代の遺跡で出土した指輪について資料を集め、分類を行った。合計12型式に分類したことになるが、このうちいくつかの型式の指輪については出土する遺跡の分布に偏りがある。

Aa型指輪は後漢～魏晋期の墓で出土する指輪のうち、最も一般的な指輪である。それに対してBa型指輪は、遼寧省遼陽市の馬圈子3号墓のように遼東でも出土例があるが（大連市馬圈子漢魏晋墓地考古隊1993）、特に後漢頃の早期の資料が東シナ海に面した広西、広東省、あるいは湖南省に多い傾向が見られる。同様の傾向は小さな石を1点象嵌したBe型指輪においてもみられる。これら型式の指輪の発生起源を華南周辺とするか外来とするかは意見の相違があると思われるが、同地域での分布は南海を通じた交易に関係するとみられる。東晋においては、Be型の指輪で有名な資料に、江蘇省南京市の象山7号墓で出

土した8面体のダイヤモンドを象嵌した指輪がある。象山墓地は東晋の有力豪族の一角である琅琊王氏の墓地であり⁽⁹⁾、同7号墓からはガラス杯2点、象山1号からは鸚鵡貝に金釦を施した杯が出土しており(南京市文物保管委員会1965)、東晋貴族の奢侈品の中に南海を通じた交易によって入手したとみられる資料があることが注目されている。

Bbとした漢字印章指輪については、長江中流域の後漢の遺跡に資料が集中する。

そしてBc型の指輪については、長江中下流域の両晋期の遺跡で出土している。この指輪については、後漢頃から四川省以下長江流域一帯で指摘されている、神仙図像と混淆した仏教図像、そして仏教の南伝ルートとの関わりが指摘できる(大谷2015)。

これに対して、Bf～Bj型の指輪は華北以北の遺跡でいずれも出土している。1点を1型式とした場合も多く、これらについては淵源や分布を考察することはできないが、三燕の遺跡である房身村2号墓で出土した指輪と呼和浩特市近郊の北魏墓で出土したBh型の指輪をみると、大型化や太い腕部上の象嵌などに同時代的な共通する要素もみられる。

Bj型指輪については、先行研究で指摘したとおり、張慶捷と岩本篤志の論考がある。張慶捷は発掘を担当した徐顕秀墓の貴石印章指輪について当初検討しており(張慶捷・常一民2003)、後に資料を増補し加筆している(張慶捷2010)。張慶捷はまず徐顕秀墓の指輪について詳細に観察し、連珠文、腕の2匹の向かい合う獣、宝石に刻まれた画像は中原の伝統様式でなく、いずれも西域由来の要素とみた。そして新疆を含む現中国国内の遺跡から出土した大型の宝石を象嵌した指輪を集成し、これらの指輪についてソグド商人の手を介して中央アジア・シルクロードを経由して流入したものと指摘している。また宝石に刻まれた画像については、徐顕秀墓の指輪の画像はヘラクレスなどギリシャ・ローマ神話の登場人物と関係がある可能性、バクトリア銀貨やスキタイ国王の銀貨肖像にあるゼウスの特徴との類似を指摘し、製作年代が比較的古いのではないかとした。そしてこのような指輪をギリシャ文明が中央アジアに伝わり、ソグド芸術と結合したのち東伝してきた証拠として位置づけた。これに対して岩本は、徐顕秀墓の指輪の入手経路、すなわちソグド商人の手を介して中央アジア・シルクロードを経由して流入したという張慶捷の見方については妥当なところとする。しかし貴石に刻まれた画像の来源と位置づけは張慶捷と意見を異にしている。氏は、北朝隋唐期の貴石印章のほぼすべてがササン朝領域内で発見された印章と「同じ」画像を用いており、その多くがゾロアスター教の神像であるとの見解を示した(岩本2005a・b・2006)。すなわち氏の見解は、張慶捷のギリシャ・ローマの貴石印章を用いる文化がユーラシア大陸を長時間かけて東漸してきたという見方を否定し、同時代に西アジアで用いられていた印章もしくはほぼ同等のものが流入しているというものである。画像と神像の同定については今後の課題であるものの、筆者は最も自然な解釈である岩本の見解に同意する。

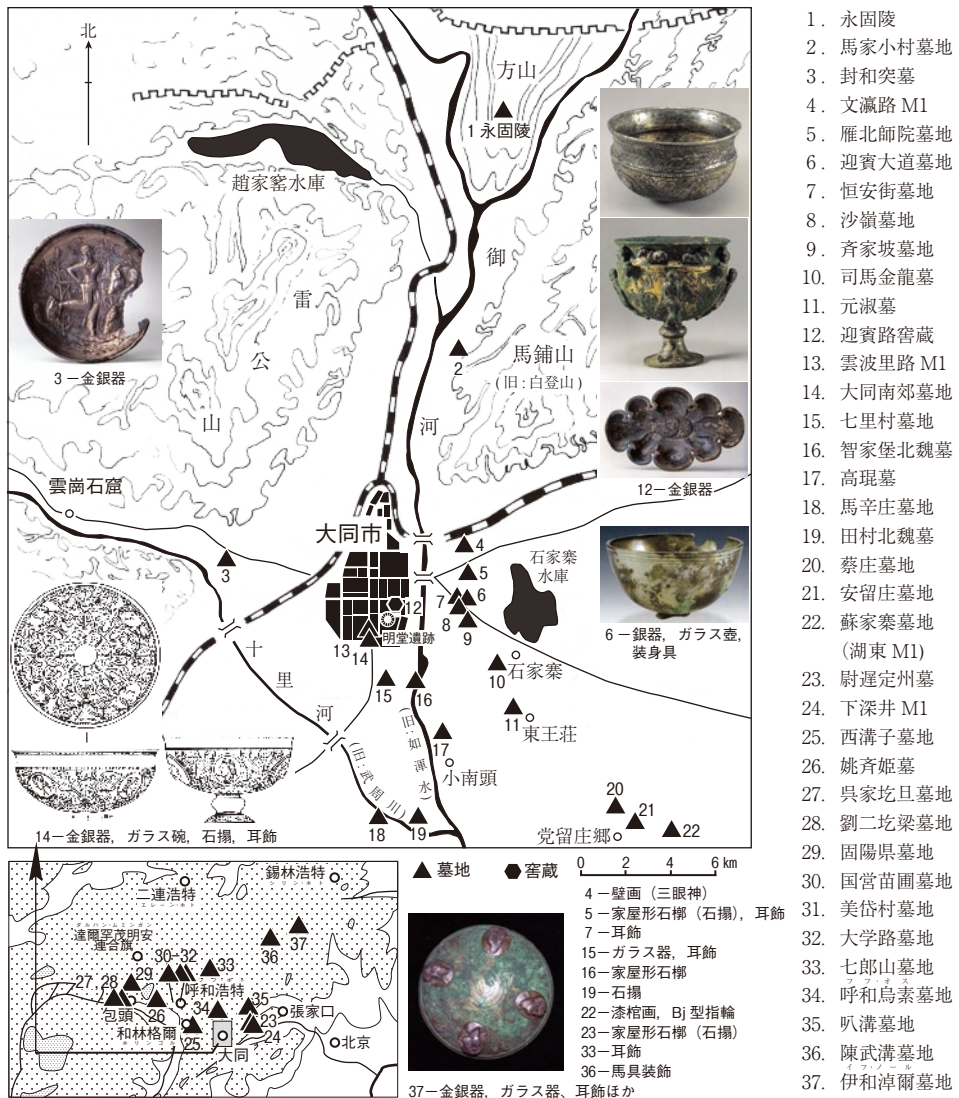


図7 北魏墓と西方的要素のある出土資料

Bj型とした指輪のうち、画像をもつ貴石印章指輪については以上のような見解があるが、Bj型指輪の中には画像を持たない指輪も存在する⁽¹⁰⁾。画像を持たないBj型指輪についても、史君墓で出土していることからみてソグド人との関連が指摘される。Bj型指輪を非中国的要素を持つ資料と仮定した場合、いつの段階から中国へ流入しているのかという点が問題となる。現在のところ、Bj型指輪の最古例は遼寧省瀋陽市の苗圃20号墓である。墓の年代については前漢中晩期と報告されているが、追葬の影響を含めて前漢末以降に下がる可能性を検討すべきと考える。この指輪については、腕部に粒金を施す点などから非中国的な要素を指摘できるが、類例を指摘できない。漢代の粒金を施した資料としては、

打出し式の龍文帯鉸具があり、新疆焉耆^{えんき}県のカラ・シャルや遼寧省大連市の営城子76号墓、朝鮮平壤の石巖里9号墓と、漢の領域内外縁地で出土している。苗圃20号墓出土のBj型指輪については、これら後漢代の粒金製品との関連の検討が重要である。

次に古いBj型指輪は山西省大同県の湖東北魏墓出土の指輪である。山西省大同市は拓跋珪が皇始三年（398）に盛楽から平城に遷都して以来、孝文帝による太和18年の洛陽遷都まで約100年間都が置かれていた。そのため大同市近郊には多くの北魏墓が分布し、これら北魏平城期の墓から金銀器、ガラス器、耳飾など、中央ユーラシアから伝来した遺物が出土することが明らかになってきている（図7）。その理由としては、延和三年（433）に北涼の沮渠蒙遜^{そきよもうそん}が死亡して以降、北魏は北涼に対する支配を強めており、太延五年（439）には北涼を滅ぼして西域へと通じる河西回廊を支配下に置いたことが大きいと考えられる⁽¹¹⁾。

4. おわりに

本稿は中国で出土した漢から唐代にかけての指輪について考察した。指輪は指輪Aと指輪Bの2種類に大別した後、前者を3型式、後者を9型式に分類した。そしてその後、各型式の指輪の分布にみられる特徴と、各型式の指輪が出現する背景等について考察した。Bc型、Be型の指輪については、海のシルクロードともよばれる南海の交易と関連する可能性を指摘した。そして、Bc型指輪については蜀から長江下流域あるいは南海を通じた仏教伝来に関連する資料であることを指摘した。これらが漢から魏晉期にかけての現中国南半でみられた現象であったのに対して、Bf～Bj型は中国北半でみられる動向と関連する。1点については後漢代の資料であるが、2点目のBj型指輪は北魏平城期に出現しており、この時期に開始し、以降隋唐へとつながってゆく中央ユーラシアとの交易に関連することを指摘した。

以上散漫ではあるものの、中国出土の指輪について検討した。指輪を資料とした研究としては、今後は新疆以西の草原地帯に分布する、いわゆる民族移動期の資料の位置づけが課題であると考えている。

註

- (1) 本稿において中国と言う場合には、西域にあたる新疆維吾爾^{ウイグル}自治区を含めない。新疆出土の指輪に関してはtotani（2015）参照。また、本稿では漢～唐代の資料について検討するが、唐代の資料については前代より継続する型式の指輪のみをとり上げている。
- (2) 宝女墩104号墓からは紀年銘のある漆器が出土しているが、上限年代は大泉五十が鑄造された居摂二年（7）である。広陵国は新の始建国元年（9）に廃されている。
- (3) 墓からは「劉崎之印」「司徒之印章」が出土し、被葬者は『後漢書』巻6、孝順孝沖孝質帝紀などに記載のある劉崎と推定されている。劉崎は陽嘉三年（135）に司徒の職を辞しており、没年はそれ以

- 降となる。
- (4) Bd型については欠番とする。
 - (5) 「金指輪 1点。上にトルコ石を嵌め、表面は破損しており、元は動物形の装飾であったようだ。1955年に発見された北魏墓出土の指輪に似る」(内蒙古文物工作队1962)。
 - (6) 報告当時は定県であったが、定州市に改変されている。
 - (7) 銘文の釈読については、林梅村(1997)、羅豊(2004)、郭物(2015)があり、意見が一致していない。意味の方を各案列記すると、林梅村は中国語で「自由、繁榮、幸福」、羅豊は中国語で「世界寛容!世界寛容!世界寛容!」(釈読:山内和也)、郭物は英語で「pious」の3回繰り返し(釈読:Rezaaibaghbidi, M. B. Vosooghi, Amuzegarの3名)とする。ただし山内によると、「世界寛容!」と釈読したものの、二度の繰り返しは認められても、三度繰り返すには1文字足りないという。
 - (8) 張慶捷は、この美岱村北魏墓の指輪に関する出典として内蒙古文物工作队(1962)と内蒙古文物工作队編(1964)を挙げている。後者は前者を再収録しているため前者原報告の記述が重要だが、内蒙古文物工作队(1962)の金製指輪1点の記述は上記註5の通りであり、Bh型指輪と思われる。実際に呼和浩特市郊出土というBh型指輪もある(図4-2)。したがって美岱村北魏墓出土というこの指輪については出土遺跡に関する典拠が不明である。
 - (9) 象山墓地のうち、墓誌の出土から以下7基は被葬者と埋葬上限年代が判明する。象山1号墓は王興之・宋和合葬墓(永和四年(348)合葬)、象山5号墓は王閏之(升平二年(358)葬)、象山3号墓は王丹虎(升平三年(359)葬)、象山8号墓は王企之(太和二年(367)葬)、象山9号墓は王建之・劉媚子合葬墓(咸安二年(372)葬)、象山11号墓は王康之・何法登合葬墓(太元十四年(389)葬)、象山6号墓は王彬の継室夫人の夏金虎(太元十七年[392]卒)。被葬者不明の象山7号墓の年代は東晋早期である。
 - (10) 画像のある資料と画像のない資料でBj型指輪を二分するという考え方もできるが、石を欠失している場合には判断できないため、一括するのが妥当と考えている。
 - (11) 太延元年(435)2月には蠕蠕に加えて初めて西域の焉耆と車師諸国が北魏に対して遣使朝献しており、同年6月には高麗と鄯善国、同年7月には粟特国が同じく初めて遣使朝献している。『魏書』卷4上 世祖太武帝紀)
 - (12) 題名は「沙子灘」になっているが、文中で遺跡名は「砂子灘」と記載されている。
 - (13) この論考は張慶捷・常一民(2003)を再録したと書かれているが、実際には新たに図版を加えて書き直されている。

引用・参考文献

<日本語・中国語>

岩本篤志2005a「北朝隋唐期の貴石印章とその用途—ソグド人・ササン朝との関係をめぐって—」『東アジア：歴史と文化』第14号、新潟大学東アジア学会。

岩本篤志2005b「徐顕秀墓出土貴石印章と北斉政權」『史滴』27号、早稲田大学東洋史懇談会。

岩本篤志2006「中国・北朝隋唐期の貴石印章とソグド人—(補章)ユーラシア大陸における印章と東西交流」『環東アジアセンター年報』1。

内蒙古文物工作队1962「内蒙古呼和浩特市美岱村北魏墓」『考古』1962年第2期。

内蒙古文物工作队編1964「呼和浩特市美岱村北魏墓」『内蒙古文物資料選輯』内蒙古人民出版社。

内蒙古文物工作队・内蒙古博物館1975「呼和浩特市附近出土的国外金銀幣」『考古』1975年第3期。

大谷育恵2011「三燕金属製装身具の研究」『金沢大学考古学研究室紀要』32号、金沢大学人文学類考古学研究室。

大谷育恵2012「漢—北魏期における耳飾の展開とその画期—中国北辺を対象とした金属製装身具の研究

(1) 一『山口大学考古学論集』中村友博先生退任記念事業会。

大谷育恵2015「仏像が表現された金属製装身具」『金沢大学考古学紀要』36号、金沢大学人文学類考古学研究室。

郭物2015「固原史訶耽夫妻合葬墓所出宝石印章図案考」『考古與文物』2015年第5期。

河北省文物研究所2009『河北考古重要発現：1949-2009』化学出版社。

河北省文物局文物工作隊1966「河北定県出土北魏石函」『考古』1966年第5期。

韓立森・朱岩石・胡春華・岡村秀典・廣川守・向井佑介2013「河北省定州北魏石函出土遺物再研究」『考古学集刊』19、科学出版社。

黄正建2006「唐代の指輪」『7・8世紀の東アジア：東アジアにおける文化交流の再検討』、大阪経済法科大学出版部。

江西省文物考古研究所・南昌市博物館2001「南昌火車站東晋墓葬群發掘簡報」『文物』2001年第2期。

广西壮族自治区文物工作隊・貴港市文物管理所2006「广西貴港深釘嶺漢墓發掘報告」『考古學報』2006年第1期。

衡陽市文物處・耒陽市文物局2008「湖南耒陽白洋渡漢晋南朝墓」『考古學報』2008年第4期。

国家文物局主編2002『中国文物地図集』内蒙古自治区分冊、西安地圖出版社。

国家文物局主編2006『中国文物地図集』山西分冊、中国地圖出版社。

湖南省博物館1965「長沙南郊沙子塘漢墓」『考古』1965年第3期。⁽¹²⁾

湖南省博物館1984「湖南資興東漢墓」『考古學報』1984年第1期。

山西大学歴史文化学院・山西省考古研究所・大同市博物館2006『大同南郊北魏墓群』科学出版社。

西安市文物保護考古研究院2014『北周史君墓』文物出版社。

西安市文物保護考古所2005「西安北周涼州薩保史君墓發掘簡報」『文物』2005年第3期。

石家莊地区革委会文化局文物發掘組1977「河北贊皇東魏李希宗墓」『考古』1977年第6期。

曾布川寛・岡田健責任編集2000『世界美術大全集』東洋編3 三国・南北朝、小学館。

太原市文物考古研究所・山西省考古研究所2003「太原北齐徐顕秀墓發掘簡報」『文物』2003年第10期。

中国社会科学院考古研究所河南二隊1996「河南偃師市杏園村唐墓的發掘」『考古』1996年第12期。

中国社会科学院考古研究所洛陽發掘隊1963「洛陽西郊漢墓發掘報告」『考古學報』1963年第2期。

張慶捷2010「北齐徐顕秀墓外来宝石戒指及其社会背景」『民族匯聚與文明互動—北朝社会的考古学觀察』商務印書館。⁽¹³⁾

張慶捷・常一民2003「北齐徐顕秀墓出土的嵌藍寶石金戒指」『文物』2003年第10期。

張景明2002「内蒙古涼城県小壩子灘金銀器窖藏」『文物』2002年第8期。

陳萬雄主編1996『中国地域文化大系 草原文化—遊牧民族的広闊舞台』商務印書館。

大広編集2005『中国☆美的十字路展』図録。

大同市考古研究所2006「山西大同迎賓大道北魏墓群」『文物』2006年第10期。

大連市馬圈子漢魏晋墓地考古隊1993「遼寧瓦房店馬圈子漢魏晋墓地發掘」『考古』1993年第1期。

唐金裕1959「西安西郊隋李静訓墓發掘簡報」『考古』1959年第9期。

杜葆仁・夏振英・呼林貴1986「東漢司徒劉崎及其家族墓的清理」『考古與文物』1986年第5期。

南京市博物館1972「南京象山五号、六号、七号墓清理簡報」『文物』1972年第11期。

南京市博物館2002「南京象山11号墓清理簡報」『文物』2002年第7期。

南京市博物館2009「南京市東漢建安二十四年龍桃杖墓」『考古』2009年第1期。

南京市博物館・南京市江寧区博物館2008「南京江寧上坊孫吳墓發掘簡報」『文物』2008年第12期。

南京市文物保管委員会1965「南京人台山東晋興之夫婦墓發掘報告」『文物』1965年第6期。

南京市文物保管委員会1965「南京象山東晋王丹虎墓和二、四号墓發掘簡報」『文物』1965年第10期。

寧夏文物考古研究所1992「寧夏固原隋史勿射墓發掘簡報」『文物』1992年第10期。

- 寧夏固原歴史博物館2004『固原歴史文物』科学出版社。
- 寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館1985「寧夏固原北周李賢夫婦墓發掘簡報」『文物』1985年第11期。
- 馬鞍山市文物管理所1990「馬鞍山市盆山發現六朝墓」『文物研究』総6期、153-157頁（再収：王俊主編『馬鞍山六朝墓葬發掘與研究』科学出版社2008。
- 林已奈夫編1976『漢代の文物』京都大学人文科学研究所。
- 馮永驅主編2005『銖積寸累（広州考古十年出土文物選萃）』文物出版社。
- 香港区城市政府・内蒙古自治区博物館1995『鞍馬文化—中国古代北方遊牧民族』香港区城市政局。
- 百橋明徳・中野徹責任編集1997『世界美術大全集』東洋編4 隋・唐、小学館。
- 森本公誠1996「偃師杏園1902号唐墓出土金戒指上の銘文」『考古』1996年第12期。
- 洛陽市文物考古研究院2012「洛陽市孟津朱倉北魏墓」『文物』2012年第12期。
- 洛陽市文物工作隊2011「河南洛陽市吉利区两座北魏墓的發掘」『考古』2011年第9期。
- 羅豊主編1996『固原南郊隋唐墓地』文物出版社。
- 羅豊2004『胡漢之間—“絲綢之路”與西北歷史考古』文物出版社。
- 李逸友1957「關於内蒙古土默特旗出土文物狀況的補正—兼答静宜同志」『考古通訊』1957年第1期。
- 陸大為1960「遼寧北票房身村晋墓發掘簡報」『考古』1960年第1期。
- 劉金友・王飛峰2015「大連營城子漢墓出土金帶扣及其相關研究」『北方文物』2015-3期。
- 劉洪元2011「内蒙古烏蘭察布陳武溝墓葬群」『中国考古新發現 年度記錄2010』（中国文化遺產2011年増刊）中国文物報社。
- 遼寧省文物考古研究所編2002『三燕文物精粹』遼寧人民出版社。
- 遼寧省文物考古研究所2014a『遼海記憶—遼寧考古六十年重要發現（1954-2014）』遼寧人民出版社。
- 遼寧省文物考古研究所2014b「遼寧遼陽苗圃墓地西漢磚室墓發掘簡報」『文物』2014年第11期。
- 林梅村1997「固原粟特墓所出中古波斯文印章及其相關問題」『考古與文物』1997年第1期。
- 熊存瑞1987「隋李靜訓墓出土金項鏈、金手鐲的產地問題」『文物』1987年第10期。
- 揚州博物館・邗江県図書館1991「江蘇邗江県楊寿郷宝女墩新莽墓」『文物』1991年第10期。
- 〈欧文〉
- Museum Rietberg Zürich, 1994, Chinese Gold und Silber : die Sammlung Pierre Uldry, Zürich : Museum Rietberg.
- Otani Ikue, 2015, Inlaid rings and East-West interaction in the Han-Tang era, 『中国北方及蒙古、貝加爾、西伯利亞地区古代文化』科学出版社

挿図出典

- 図1：1 - 南京市博物館2009 図版10-5 2 - 南京市博物館・南京市江寧区博物館2008 16頁 図44 3 - 遼寧省文物考古研究所編2002 図版29 4 - 中国社会科学院考古研究所洛陽發掘隊1963 34頁 図26-8 5 - 湖南省博物館1984 107頁 図49-7 6 - 江西省文物考古研究所・南昌市博物館2001 封裏（左より3番目） 7 - 湖南省博物館1965 図版4-8
- 図2：陳萬雄主編1996 pl.126
- 図3：遼寧省文物考古研究所2014a 260頁
- 図4：1・2 - 香港区城市政府・内蒙古自治区博物館1995 77頁 3 - Museum Rietberg Zürich1994 pl.106
- 図5：1・2 - 韓立森・朱岩石・胡春華・岡村秀典・廣川守・向井佑介2013 彩版18-5・18-6
- 図6：1 - 遼寧省文物考古研究所2014b 12頁 図18-10 2 - 張慶捷2010 423頁 図8 3 - 洛陽市文物工作隊2011 図版13-3 4左 - 石家莊地区革委会文化局文物發掘組1977 図版6-5 4右 - 河北省文物研究所2009 238頁 下 5 - 寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館1985 12頁 図25 6 - 太原市

文物考古研究所・山西省考古研究所2003 15頁 図19 7 - 西安市文物保護考古所2005 28頁 図46・
47 8上 - 百橋明穂・中野徹責任編集1997改変 8下 - 熊存瑞1987 77頁 図1改変 9 - 寧夏固原
歴史博物館2004 pl.123上 10 - 寧夏固原歴史博物館2004 pl.126上 11 - 張慶捷2010 425頁 図13
12 - 筆者撮影 13 - 内蒙古文物工作隊・内蒙古博物館1975 図版8-5 14左 - 中国社会科学院考古
研究所河南二隊1996 図版3-2 14右上 - 同6頁 図13-4、14右下 - 同24頁 図2 15 - 洛陽市文物
考古研究院2012 48頁 図25-9

図7 : 著者作成 (大同市の地図 : 山西大学歴史文化学院・山西省考古研究所・大同市博物館2006 写真 :
3 - 大広編集2005 pl.92 6 - 大同市考古研究所2006 59頁 図27 12上 - 曾布川寛・岡田健責任編
集2000 pl.149 中 - 同pl.148、下 - 大広編集2005 pl.97上 14左 - 山西大学歴史文化学院・山西省
考古研究所・大同市博物館2006 229頁 図105d 14右 - 同241頁 図107c上半 37 - 劉洪元2011 p.97
頁 左上)